

助成年度：平成 13 年度

[所属] 京都大学大学院 農学研究科

[役職] 教授

[氏名] 森本 幸裕 (他計 7 名)

[課題]

都市の野生生物生息環境ダイナミクスと順応的管理

[内容]

不確実性に富む都市緑地の生態遷移の有効な利用と管理のために必要な、科学的なモニタリングシステムと利用者、管理者、研究者による順応的管理システムの開発を目的とした研究を行った。京都市の都心に 5 年前に造成された梅小路公園いのちの森 (0.6ha)、および捕植後約 60 年を経過した半自然林である下賀茂神社社の森と土地造成と植林後 30 年目の万博記念公園自然文化園地区において実験的に森をパッチ状 (帯状) に伐採した地点では生物種の変化を調査し、人為的管理下での生態遷移を明らかにしようとした。大規模な攪乱がない糺の森では約 60 年前に捕植されたクスノキやカシ類による照葉樹林化が進化しつつあり、本来の立地に適したニレ科樹林の更新に課題がある。一方、園路ぞいに落葉に堆積が行われるところではタシロランを発見し、成熟した都市孤立緑地への希少種の侵入と定着の貴重な記録となった。若令人工照葉樹林の単層の生物多様性に欠ける森になることの改良法として、パッチ状間伐と近隣の里山表土撒きだしが、植生およびチョウの多様性の面で有効であることが確かめられた。シダ類は周辺二次林より孤立造成緑地ではフロラが貧弱であり、その大きな原因が微環境の多様性の欠如と考えられた。3 つの緑地の大型菌相は年数を経るほど腐生性より菌根性のものの増加が認められた。またシジュウカラを指標とした都市の野生生物生息循環のモデル化により、整備の方法論を提案した。これらの成果をホームページ、市民観察会などで紹介し、研究をとりまとめた冊子も刊行し、緑地管理者らと検討を重ね、緑地管理の目標設定、その実行に協力した。